

妄想の一考察

佐々木 容 道

「妄想」という言葉は今日、しばしば心理学的な意味、即ち「根拠の無い主観的な信念」とか「病的な状態から生じた誤った判断⁽²⁾」という意味で用いられる。精神医学者の宮本忠雄氏によれば、どういふ経緯で「妄想」の語が、*delusion* に対応する言葉として選ばれたのか明らかでないという事だが、宮本氏も認める通り、元を正せば、この「妄想」は仏教用語であり、中国・日本の仏教に於いて古くから用いられてきた、人間の内面の否定さるべき側面を示す語である。後述する様に、「妄想」は主に、サンスクリットの *vikalpa, parikalpa* など、語根 *√kip* の派生語から訳されており、上田義文氏が「妄念論」の中で、『大乘起信論』中の妄念や妄想心を、「凡夫の顛倒せる分別を意味し、……虚妄分別に他ならない。」と説明する様に、虚妄な想念であり、妄りな分別構想作用である。⁽³⁾

本論で私は、禪の教理に用いられる「妄想」の、思想的背景を明らかにすべく、まず、初期禅思想と関わりを持つ『楞伽阿跋多羅宝经⁽⁴⁾』（以下『四卷楞伽』と略記）の「妄想」について考察し、次に、「妄想」の古い適用例を漢訳仏典に探り、更に、「妄想」と漢訳される *vikalpa, parikalpa* などの特性を調べ、最後に、『四卷楞伽』の「妄想」と禅録や禅論書の「妄想」との関係に触れて、小論を終えたい。

唐代の禪僧、汾州無業（七六〇―八一二）は、学人の質問に対して多く「莫妄想」（妄想するなかれ）と答え、六祖慧能（六三八―七一三）は風が動くか旗が動くかを言い争っている僧たちと異り、印宗法師に対して、衆生の妄想心が動くのだと答えたという。この内「莫妄想」は、雲門文偃（八六四―九九九）の言葉でもあり、この言葉が示す様に、禪では、妄想分別を離れて無心に生きる事が要求され、慧能の言葉が示す様に、外的対象ではなく、我々の内面の妄想心の在り方が問題にされる。それ故に「妄想」は、禪に於いても極めて重要な概念であり、語録や禪論書によく現れるのだが、言うまでもなく、これは漢訳經典に由来する用語であり、漢訳經典に基づいて、禪でも用いられた言葉である。

そこでこの章では、禪に於ける「妄想」の特質を理解すべく、初期禪思想に影響を及ぼした。求那跋陀羅訳の『四卷楞伽』に記される「妄想」について考察したい。『四卷楞伽』は比較的多く「妄想」という語を含み、『楞伽經』の他の二訳と比べても、「妄想」という訳語が多い。

そこでまず、「妄想」の何たるかを記した部分を『四卷楞伽』から引用すると、衆生の迷いと悟りとの様相を示す五法（相・名・妄想・如如・正智）を説明した部分で、「妄想」は、(a)「大慧。彼妄想者。施設衆名。顯示諸相」・(b)「施設衆名。顯示諸相。瓶等心心法。是名妄想。」と記されており、他の部分では、(c)「妄想說三所想」・(d)「當離生住滅一異俱不俱有無非有非無常無常等惡見妄想」・(e)「若言一異者。是外道妄想」・(f)「觀世妄想、如幻夢芭蕉」・(g)「一切三有皆是不実妄想所生」・(h)「若菩薩摩訶薩欲知自心現量摂受及摂受者妄想境界。當離群聚習俗睡眠」などと説示される。

この内、最初の五法の教理は、『瑜伽師地論』の撰決択分にも存在し、ここでは「妄想」即ち「分別」が、「分別とは何か。三界に属する心心所法である。」(man par rlog pa gan ze na / khams gsum na spyod pai sems dan sems las byun bai chos rnamso)と記されているが、(b)の原文でも「分別(vikalpa)が「心心所と名」

けられるもの」(cittacaittasamśadbhī)と説明されており、両記述が同一の教理に基づいている事が判る。又(a) (b)に共通する「施設衆名、顯示諸相。」という訳文は、「それによって、名を顯示し、相を明らかにする、……」(yena nāma samudrayati / nimitavyañjakam...)という原文に基づいており、『大乘義章』にも同様の事が、「言妄想者。即前立名取相之心。虚構不真。名為妄想。」と記されている。次に(c)は、「分別する事は、分別されたもの「を表わす」と言われており、……」(kalpanā kalpitiety uktam...)という原文の訳だが、「妄想」が所想であり想念である事は、(a) (b)の叙述からも納得できる。では誰がどの様に妄想するか。『四卷楞伽』の場合、妄想するのは外道や愚夫などであり、彼らは、(d) (e)に示される様に、一(ekatva)異(anyatva)無(nāsti)有(asti)などの諸相を明らかにするという仕方である。その妄想は、「自心所現の所取・能取として現われる分別の境界を完全に知ろうと欲する菩薩は、群衆・聚落・睡眠の蓋を離れているべきである。」(bodhisattvena svacittadīśyagrāhyagrāhaka vikalpāgocaram parijñātukāmena saṃganikāsamsargamiddhanivarānavigatena bhavi-vyam)という原文に基づいて(h)の叙述の様に、自心現量に於ける摂受(grāhya 所取)と摂受者(grāhaka 能取)という形で存在する。又、自心現量(svacittadīśyamātra 唯自心所現)の立場からは、世間は虚妄なる妄想である。それ故に、(f)の場合、「世間を、芭蕉・幻の如く分別されたものと見るべし。」(kadāliskandhamāyābham lokam paśyed vikalpitam)という原文に基づいて、「世」が「妄想」であり、「如幻夢芭蕉」だと説明され、(g)では、三有が不実妄想(abhūtavikalpa 虚妄分別)から生ずると述べられ、妄想の虚妄性が示されている。それではなぜ妄想は生じるのか。次に、『四卷楞伽』中、妄想の生ずる原因について記した部分を、原文と共に引用する。

(一)「我説、妄想從三種不実義計著生。[idam ucyate mayā vikalpo 'bhūtārthavaicitryād abhiniveśāt pravartate ... iti //]「分別は、虚妄なる対象を種種にするという愛着から生ずると、私は言う。」・(二)「不能覺知心現

量。而生_三妄想_三」(svacitradīśyamātrānavabodhad brāhmaṇa vikalpaḥ pravartate)「バラモンよ、唯自心所現を覚知しないから、分別が生ず。」・(k)「不_レ覚_レ彼五法自性識_二無我自心現外性_一。凡夫妄想。」(pañcadharmasvabhāvajñānanairāmyadvayasvacitradīśyabāhāvābhāvānavabodhad vikalpaḥ pravartate balānaṁ)「五法と〔三〕性と〔八〕識と_二無我と_一、自心所現の外的存在の無を覚知しないから、愚者達に分別が生ず。」

この内(i)では、「不_レ実義計著」が、(j)では、「不_レ能_レ覚_レ知自心現量」が、(k)では、五法や自心現外性を覺せざる事が「妄想」(vikalpa)の生ずる原因とされる。つまり、真実の道理を覺知せず、とりわけ、外的対象が唯自心所現であり虚妄である事を覺知(avabodha)せず、対象に愛着するから、妄想が生ずると言うのである。従って逆に、自心現量などを覺知する事によって、妄想が生じなくなると言える。『四卷楞伽』にはその事が「覺_三了有無自心現量。妄想不_レ生_三不受_三外塵_二妄想永息_一」・「善覺_三知自心現量。見_三人無我及法無我相_一。妄想不_レ生_三」・「但覺_三自心現量。妄想不_レ生_三」・(1)「不_レ識_三心及縁_一。則起_三二妄想_一。了_三心及境界_一。妄想則不_レ生_三」などと記され、妄想を除去する為に、心(citta)や境界(dīśya)の実相即ち、自心現量の覺知が必要である事が強調される。

では、妄想が生じなければどうなるか。『四卷楞伽』では、妄想が除去されて生じてない状態が、(m)「妄想不_レ生者。空無相無作。入_三三脱門_一、名為_三解脱_一」・(n)「妄想識滅、名為_三涅槃_一」・(o)「涅槃者。聖智自覺境界。離_三斷常妄想性非性_一」・(p)「無始虚偽過惡妄想習氣因滅。自心現知外義。妄想身軀。解脱_一」などと記されている。この内、最初の(m)は、「分別が生じない者は、無相・空・無願の三解脱に入るので、解脱せる者と言われる。」(apra-vṛttikalpasyañimitasūnyatāpraṇihavimokṣatrayāvatārān mukta ity ucyate //)とどう原文の訳か、妄想の不生によつて三解脱に入り解脱する事を示し、(n)は、「分別を伴う意識の滅が、涅槃と言われる。」(vikalpakasya manovijñānasya vyāvṛtīr nirvāṇam ity ucyate)とどう原文の訳で、妄想識の滅が涅槃である事を示している。又(0)では、「涅槃は、聖知による自内証の境界であり、常断の分別や有無を離れている。」(nirvāṇam āryajñā-

napratyātmagatigocarān śāśvatoccheda vikalpabhāvābhāvavivarjitaṃ /) という原文に基づいて、涅槃が、聖知自覚境界であり妄想を離れたものであると述べられ、(p)では、「大慧よ、自心所現の外界の対象を遍く知る事により、無始時來の戲論の龜重なる分別の習氣の因を滅し、分別の根拠を転換する事が解脱であり、……」(anādikālapapa-ñca dausūlyavikalpavāsanāhnetuvivṛtti mahāmate svacittadīśyabāhyārthaparjñānād vikalpasāśrayaparivṛtti mahāmate mokṣo) という原文に基づいて、無始來の虚偽過惠妄想的習氣の因を滅し、妄想身を転じて解脱する事が述べられ、妄想的習氣の存在する事が示されている。これらの叙述から、解脱や涅槃が妄想の生じていない状態であり、妄想を滅して人は解脱し涅槃に入るといふ事が判る。

ところで唯識思想では、衆生の三種の存在形態を示す三性説が説かれるが、『四卷楞伽』では、三性が「妄想自性」「縁起自性」「成自性」と訳され、妄想自性 (parikalpita-svabhāva) について、「依^二縁起自性、種種妄想自性計著生。」・「名相計著相者。……事相計著相者。……是名^二三種妄想自性相。」・「云何妄想自性分別通相。謂言説妄想。

所説事妄想。相妄想。利妄想。自性妄想。因妄想。見妄想。成妄想。生妄想。不生妄想。相續妄想。縛不縛妄想。是名妄想自性分別通相。」などと説明され、成自性 (parinispāna-svabhāva 完成された存在形態) について、「離^二名相事相妄想。聖智所得及自覺聖智趣所行境界。是名^二成自性如来藏心。」・「離^二不実妄想。是名^二如如。……正智及如如是則^二成相。」などと説明されている。これらの叙述から、種種の妄想を内容とする妄想自性は、縁起自性 (paratantra-svabhāva 他に依存する存在形態) に依るもので、事相 (vastunimita 事物の因相) と名相 (nāma 名) とに對する執着 (abhiniveśa) であり、妄想を離れる事によって、成自性へと転ぜられるものだという事が判る。

以上の様に『四卷楞伽』では、相を顯示し名を施設する、愛着を伴った妄りな分別構想作用、或いは、妄りて虚妄な想念が「妄想」とされ、自心現量などの眞実相を覚知する事によって、妄想が生じなくなり、解脱すると述べられ、妄想を離れた成自性のあり方が要求される。

それでは、この「妄想」という語は、『四卷楞伽』以前に翻訳された經典中、どの程度またどの様に用いられているか。続いて、初期漢訳經典における「妄想」について考察する。

二

『四卷楞伽』に先行する漢訳經典の場合、古いもの程、經中に現われる「妄想」の数が少ない。ではいつ頃から、仏教特有の「妄想」という訳語は用いられているか。その点を明らかにすべく、まず後漢時代に訳された經典を調べると、内藤龍雄氏により、訳語訳文から見て後漢のものとなし得ないとも言われ、『出三蔵記集』で失訳雜經中に含まれるが、『歴代三寶記』で後漢失訳とされる『大方便仏報恩經』の内に、「妄想」が二語存在するので、次にその部分を記す。

夫人言。貪恚所生皆由_レ嫉妬。諫_レ惡以_レ忍。諫_レ怒以_レ順。我從_レ生已來。未_レ曾与_レ物共諍。諸夫人者自生_レ惱害。譬如有人夜行見_レ杙便起_レ賊想。或起_レ惡鬼之想。尋時驚怖四散馳走。或投_レ高巖。或覆_レ水火。荆棘叢林傷_レ壞身体。因_レ妄想_レ故禍害如是。一切衆生亦復如是。自生自死。如_レ蠶如_レ繭。如_レ蛾赴_レ燈。無_レ驅馳者。一切衆惡從_レ妄想_レ起。

31 妄想の考察

これは鹿母夫人の言葉で、ここで彼女は、夫人たちが自ら惱害を生ずるのは、例えば夜に杙を見て賊想や惡鬼の想を起し、逃げ回って自らを傷つける様なもので、自らの妄想によって禍害や衆惡が生ずると述べている。この内「妄想」の原語が何であるかは、原典や原典からのチベット訳が存在しないので判らないが、漢訳からのチベット訳が在るのでそれを見ると、「妄想」の部分が、「誤った想念を縁として、この様な災いに遭遇する。」(‘du śes log pa i rkyen gyis de la bu’i gnod pa dan phrad do)・「全ての過失は、真実ならざるものを想念する事から生ず。」(‘ñes pa thams cad ni mi bden par ‘du śes pa las byuñ ste /)と記されている。もしこれが原文からのチベット訳な_レ’ mihya と asatya とが「妄」_レ samjñā が「想」と漢訳されたとも考え得る。しかし実際は、「妄」が log pa,

mi bden par と「想」が 'du śes とチベット訳されているのである。

後漢時代に訳出された他の經典を調べると、『歷代三寶記』で後漢失訳とされる『受十善戒經』に一箇所、「妄想」を含む文があり、ここでは不戒の五功德利について「三者鼻根嗅_レ香。當_レ知_レ是香從_ニ八風_一起。癡風鼓動愛風吹來。花等諸香從_ニ妄想_一生_ト。」と述べられ、諸香が、妄想から生ずると知るべきだとされるが、この經典も原文やチベット訳と対照できず、『出三藏記集』では、失訳雜錄録に含められているにすぎない。それ以外の後漢の經典には「妄想」の語が見当たらない。例えば、安世高訳の經典には、妄見・妄言・妄笑などの訳語は有っても「妄想」は見当たらず、支婁迦讖訳の『般舟三昧經』で、チベット訳の rlog pa med cin ma byas zig med par / gan gis śes pas tin 'dzin 'di thob bo // gzugs kun rlog pa med par śes byas nas / mig gis gan du bltas kyan mi chags śin'... 「無分別と無作と無滅とを知る事によって、この三昧を得る。全ての色を、分別する事なく知って、目で見るものに対しても愛着せず、」の部分で、「無想無作亦無聞。是為_下解_了尊_仏一_道。見_ニ一切色_ニ不_ニ想念_一。眼無_レ所_レ著_ト」と漢訳され、akalpa が「無想」「不_レ想念」と訳された事を示す部分は有っても、現存する支婁迦讖訳の經典中「妄想」という語は見当たらない。

次に、後漢に続く三国時代に漢訳された經典を調べると、呉の支謙によって訳された經典に二語「妄想」という語を見出した。その内の一つは『了本生死經』の内にあり、不明(無明)を説明する部分で、「如是但從_ニ六種_一為_ニ一想。為_ニ合想_一。為_ニ女想_一。為_ニ男想_一。為_ニ妄想_一。為_ニ身想_一。為_ニ自在想_一。為_ニ強自在受_ニ若干種_一。故為_ニ不明_一。」と、地種・水種・火種・風種・空種・識種の六種に從う諸想の一つに「妄想」が数えられている。しかし、宋元明三本・宮内省圖書寮本では「妄想」の部分が「淨想」であり、原文では、六種に於ける (saddharāṣu) 諸々の想 (saṃjñā) が無知 (ajñāna) とつて捉えられ、それが無明 (avidyā) だとされるが、諸想の内に、一想 (ekasaṃjñā) 合想 (piṇḍasaṃjñā) は在っても、「妄想」「淨想」に相当する語は存在しない。又もう一つの用例は、『大明度經』にあり、ここでは「善

業言。闍士不作是求妄想」という表現の内に「妄想」が用いられている。しかし、宋元明三本では「想」の部分が「相」であり、原文でも、「スプーティは答えた。世尊よ、菩薩大士は決して『菩薩の修行を行じながら、私はどうしたらこの世で相(特徴)の滅を獲得できようか。』という様には努めなご。」(subhūtir āha-na sa bhagavan bodhisattvo mahāsattva evaṃ prayujyate-katham ahaṃ bodhisattvacyāṅg carannihava nimittaprahāṅam anupāpuyām hi /)と、相(nimitta)とらう語が用いられている。従って、支謙が用いた訳語は「妄想」ではなく「妄相」であり、「妄」は「忘」か「亡」の意あるいは同音適用である事が推定される。この様に、右記の二例とも「妄想」である事が疑わしい。では支謙は、後代しげば「妄想」と訳された *vikalpa* など *kalpa* に関する語を、どの様に訳しているか。それを知るべく、次に『維摩経』の支謙訳(α)・鳩摩羅什訳(β)・チベット訳(γ)を挙げて対比する。

(α) 意從^レ思有^レ垢^也。

(β) 妄想是垢。無^ニ妄想^一是淨^也。

(γ) *kun tu rtog pa ni ñon mois pa ste // mi rtog nam par mi rtog pa ni rain bzin no //* 「分別は汚れであり、無妄想・無分別は本性である。」

(α) 空復誰為。答曰。思想者也。彼亦為^レ空^也。

(β) 空可^ニ分別^一耶。答曰。分別亦空^也。

(γ) *ston pa nid kun tu btag par nus sam / smras pa / yons su rtog pa de yan ston pa ste //* 「空性は分別されうるのか。答える。その分別は又空であって。」

(α) 是病皆為^ニ不誠^一之思^ニ在^ニ衆勞^一故^也。

(β) 此病皆從^ニ前世妄想顛倒諸煩惱^一生^也。

(γ) *nad ni ... yan dag pa ma yin pa kun tu rtog pai ñon mois pa las byun ste //* 「病は……虚妄分別の煩

悩から生ず。」

これらの例文から判る様に、後秦の鳩摩羅什（三四四—四一三？）によって「妄想」或いは「分別」と訳された *saṃkalpa*, *parikalpa* を「支謙（二〜三世紀）は「思」「思想」と訳し、『仏説維摩詰經』中「妄想」という訳語を用いていない。だが同経中「phan yon du lta bar mi lhan」に相当する部分が「不墮妄見」と訳され、*Brahmajāla-sūtra* の *musāvādam pahāya musāvādā pativirato* に相当する部分が『仏説梵網六十二見經』で「不妄語」と訳されるなど、支謙訳の經典中、「妄」の熟語は多い。

続いて三国時代後の西晋時代に翻訳された經典を見ると、竺法護によって訳された諸經典中に、多く「妄想」という語が存在する。竺法護訳の經典以外では、晋世燉煌出とされる『仏説決定毘尼經』の中に、諸々の花や黄金の宮殿に如何なる作者も存在せず、それらが分別によって確立されているという内容の原文 *tesv api kāraku nāst' iha kaści / te 'pi ca sthāpita kalpavaśena /* が「彼亦未曾有作者。皆從妄想分別一起」と訳され、*kalpa* が「妄想分別」と訳されている箇所があるが、燉煌とは竺法護の居た所でもある事に留意する必要があると思ふ。

そこで、竺法護訳の經典に「妄想」の語を探すと、原典と対照できる『正法華經』に二語「妄想」が存在するが、それは原文と対応しないので、次に、チベット訳と対照できる經文を三例挙げる。

(δ) 是故天子欲見如来。當下了本際。莫懷妄想。

lha'i bu de lta bas na khyod de bzin s'egs pa blta bar 'dod na / mtha' di khon du chud par bya zin / chuñ zad kyañ rnam par brtag par mi bya'o /

それ故にデーバプトラよ汝、如来を見る事を欲するなら、この本際を了して、わずかばかりも分別するなかれ。
(ε) 何謂正業度無極有六事。……所下遵正業。未嘗妄想。不志邪品。是曰智慧。

de la yan dag pa'i las kyi mtha'i pha rol du phyin pa drug gan' ze na / ... yan dag pa'i las kyi mtha'

na brtags pa gan yin pa de ni śes rab kyi ste /

その内、正業の六波羅蜜とは何か。……正業〔によって〕分別されていない事、それが智慧の〔波羅蜜〕であらう。

(2) 以平等一則於諸法不懷妄想。此乃名曰還入徑路。

mham pa de'i phyir chos gan la yah nam par rtog par mi byed pas na de'i phyir lam la žugs pa zes bya'o //

平等であるが故に、如何なる法に対しても分別しないので、それ故に道に趣入したと言われる。

この内 (o) は『如幻三昧經』の (e) は『賢劫經』の (s) は『諸仏要集經』の經文であるが、チベット訳から判断して (o) (s) は vikalpa が (e) は kalpa が「妄想」と訳されたと思われる。しかし、『賢劫經』には 'chos thams cad la rlon sems med pa'i sems 「一切法に対して驕慢の無い心」に相当する部分が、「未曾有」妄「一切諸法」と訳され、'lus kyi nam par rtog pa dai dag gi nam par rtog pa med pa 「身体の分別と清淨の分別とが無い事」に相当する部分が、「身明口淨無有衆想」と訳されるなど、'manyana が「妄想」と、'vikalpa が「想」と訳された事を示す部分もあり、「妄想」の全てを vikalpa などと結びつける事はできないが、(o) など右記三例の様に kalpa に関する語が「妄想」と訳されている例は、竺法護訳の經典中に幾つか見出される。又『度世品經』などにも「妄想」は多く用いられており、この様な事から、西晋の竺法護 (二三三—三三〇) の時代に至って、「妄想」が訳語として定着し、多用される様になったと言えると思う。

さて、「妄想」の「妄」の意味について言うと、『說文解字』に「妄、乱也。以女亡声」と記され、『礼記』の注疏に「不妄指者、妄、虚也」と記される様に、「妄」は「みだり」と「虚妄」という意味を持つ。又、慧遠 (五二二—五九二) 撰の『大乘義章』に「言妄思想者。所謂凡夫迷衷之心。……所取不实。故曰妄思想。」[説為妄思想。所取不

真。故名爲妄。」と記される様に、「妄」は「不真」という意味も持つ。この内、「妄想」の妄が「虚妄」である事は、仏駄跋陀羅(三五九—四二九)訳の『大方広仏華嚴經』で、チベット訳の *lus dan sems la nam par rlog med cin* : 「身体と心に対して分別せず、」に相当する部分が「遠ニ離身心虚妄想」と訳され、原文の *vikalpa* が「虚妄想」と訳されている事からも判る。又、竺法護訳『持人菩薩經』の経文「其有爲法……由_レ從_レ虚妄思想_ニ興立。」(チベット訳は *“dus byas kyi chos rnam ni … yin dag pa ma yin pa'i kun tu brags pa las byun ho //* 「諸々の有爲法は、……虚妄分別から生ず。」)の中の「虚妄思想」(*abhitaparikalpa*)は「妄想」の意をよく示している。他方、「妄想」の「妄」が「不真」である事は、竺法護訳の『大宝積經』(三)密跡金剛力士会の中の「皆由_二不真妄想_一而興。」という表現や、『菩提達磨四行論』の「捨_レ妄_レ歸_レ真」という表現からも伺い知れる。

以上の様に、竺法護以前については明確な事を言い難いが、虚妄にして不真不実なる妄りな想念「妄想」は、竺法護訳の經典にしばしば用いられ、竺法護以後、鳩摩羅什や仏駄跋陀羅などによっても使用された。この様な訳経史的背景の中で、求那跋陀羅は『楞伽阿跋多羅宝經』を訳し、*vikalpa* や *parikalpita* などを「妄想」と訳したのだが、次章では、一般になぜ *vikalpa* などが「妄想」と訳されたのかを、原典を参照して考察したい。

三

(一)に示した『四卷楞伽』では、*vikalpa parikalpita* などが「妄想」と訳されており、(二)に示した『維摩詰所説經』では、*kun tu rlog pa (samkalpa?)* に対応して「妄想」という訳語が用いられていた。そこでこの章では、語根 *vālip* の派生語 *samkalpa*, *vikalpa*, *parikalpa*, *kalpa* について考察し、これらの語が「妄想」と訳される必然性を探ってみたい。

そこでまず *samkalpa* の場合だが、*samkalpa* は、*mama samkappam añhāya* 「私の気持を知って、」などと、単

に「思い」という意味で用いられたり、八正道中の正思(samyaksamkalpa)として用いられたりする。又或る場合には、samkalpaは諸欲を生ずる原因であり、心の安定の為に静められなければならないものとされる。後者の例を以下に挙げると、原始仏教の相應部經典には、「種々の想によって、種々の欲が生ずる。」(samkappanānattam paticca uppajjati chandanānattam //)・「人の想念[による]貪が愛欲である。」(samkapparāgo purisassa kāmo/)と記され、馬鳴作の『サウンダラナンダ』では、samkalpaが矢に塗る毒に譬えられ、龍樹造『中論』では、「貪と瞋と痴とは、想念から生ずると説かれる。」(samkalpabhavo rāgo dveso mohasāca kathiyate/)と記され、samkalpaが諸欲や三毒の原因とされる。玄奘は右の『中論』の一文を「從三憶想分別、生於貪恚癡。」と訳しているが、求那跋陀羅訳『大方広宝篋經』には、同一の教理が「善男子。是貪瞋癡從何所起。答曰文殊。從三妄想起。」と記され、「妄想」が三毒の原因とされている。又『中論』十八章の月称註には、Āryatathāgataguhyasūtraという經典が引用されるが、その經には「煩惱の止滅という、これは、想念・分別・妄想の止滅を示す句である。想念・分別・妄想の止滅という、これは、憶想・意作の止滅を示す句である。」(kleśopasāma iti samkalpavikalpaparikalpōpasāmasyātad adhivacanam / samkalpavikalpaparikalpōpasāma iti samjñāmanasikāropasāmasyātad adhivacanam)と記されており、samkalpa, vikalpa, parikalpaがkleśa(煩惱)やsamjñā-manasikāra(憶想・意作)と関係づけられている。それ故に、この様な samkalpaは抑止されなければならないが、『法句經』では、「風によって吹き上げられた塵を雲が静める様に、智慧によつて[ものを]見る時、想念は静まる。」(rajam upātāp vātena yathā megho pasāmaye, evaṃ sammanti saṃkappā yadā paññāya passti)と、智慧(paññā)の働きのよつて samkappaの寂止する事が説かれる。

vikalpaは、分別し構想する心作用である。その事を示すものとして『俱舍論』では、三種の分別(vikalpa)即ち尋(vītaraka思惟分別)を意味する自性分別(svabhāvaikalpa)と、意識と結合し散乱した慧(prajñā)を意味する計度分別(abhinirūpaṇavikalpa)と、意識と結合した全ての念(smṛti)を意味する随念分別(anusmarāṇavikalpa)と

が説かれている。(2) とくろで、この *vikalpa* は又、*saṅkalpa* 同様、煩惱を生ずる抑止さるべき心作用である。その事を示す例を挙げると『サウンダラナンダ』では、食 (*āhāra*) 自体は悪くないが、それに対する分別 (*vikalpa*) は抑止されると説かれ、(2) 『究竟一乘宝性論』では、「分別とは、業と煩惱の集起する因たる非如理作意である。」(*vikalpa ucyate karmaklesasamudayahetur ayoniśomanasikārah*) と説かれる。又『中論』第十八章の或る偈文には、「業と煩惱は分別から〔生ず。〕」(*karmakleśā vikalpatāḥ*) と説かれ、清弁はこの偈に註して、「業と煩惱とは、好ましくいか好ましくないとか構想する事の特徴とする分別から生ず。」(*las dan non monis pa dag ni sdug ba dan / mi sdug par kun tu rtog pai mshan ṅid kyi nam par rtog pa las 'byun ste /*) と述べている。(3) この様に *vikalpa* は、業と煩惱を生起する非理作意 (*ayoniśomanasikāra*) であり、『唯識二十論』で、虚偽の分別を繰り返す事によって浸みこんだ習気を対治する出世間の無分別智 (*lokottaranirvikalpapajñāna*) を得る事によって覚醒する (*prabuddho bhavati*) と述べられる様に、開覚の為には修道上、分別 (*vikalpa*) の否定された無分別智 (*nirvikalpapajñāna*) が必要とされる。

parikalpa と *saṅkalpa vikalpa* と同様の事が言える。例えば『撰大乘論』のチベット訳では、*kun tu rtog pa* (長尾雅人氏は *parikalpa* と、サンسكريットに還元) によって *kun tu brtags pai no bo ṅid* (*parikalpitasvabhāva*) があるとして、*parikalpa* がどの様に分別するかが、「概念(名)を対象として分別し、それ(概念)を他に依るという実存の上に相として把握し、それ(相)を見て執着し、種々に考察を廻らして言葉として発言し、見たり〔聞いたり〕」などの四種の言語動作を通じて世間的な言動をなし、また、ものが存在しないのに、「非存在を」存在と誤認する。(4) と説明されており、『維摩経』には、*yons su rtog pa* (*parikalpa* 分別) が「菩提は全ての分別を離れていぬ。」(*byañ chub ni yons su rtog pa thams cad dan bral ba'o /*) と記され、『サウンダラナンダ』では、「この世で〔人は〕対象の虚妄なる分別によって束縛される。」(*abhūtaparikalpena viśvāsyā hi badhyate*) と、虚妄分

別 (abhūtaparikalpa) によつて束縛される事が述べられている。

kalpa (rlog pa) も vikalpa などと内容を同じくする。例えば、『瑜伽師地論』の摂事分では、「分別と言われるものは、欲貪を生ずるものであつて、智者によつて放棄される。」(rlog pa ses ni bya ba ste / 'dod pai 'dod chags skyed ba de // mkhas pas yons su span bar bya //) と述べられ、この部分を玄奘は、「名_三虚妄分別。能生_三於欲貪。智者當_三遠離。」と訳している。又『華嚴經』では、「全ての世間は心によつて分別されている。」(jig rten thams cad sems kyis brtags pa yin //) と述べられ、この部分を仏陀跋陀羅は、「一切諸世間、皆從_三妄想_三生。」と訳している。

以上の様に、vikalpa, sankalpa, parikalpa, kalpa は、物事を思惟分別する心作用であると共に、愛着を伴い諸欲や煩惱を生ずる汚れた想念であつて、無分別智や真如・真実の在り方と比べれば、妄りて虚妄な想念・心作用である。それ故にしばしば、これらの語は「妄想」と訳され、『四卷楞伽』でも先例に従つて、vikalpa などが「妄想」と訳されたと思われる。

四

以上私は、(一)で『四卷楞伽』における「妄想」を考察した後、(二)で初期漢訳經典に「妄想」の語を探り、(三)で vikalpa, parikalpa などの意味と適用を調べて、『四卷楞伽』で「妄想」という語が用いられる理由と背景を明らかにしたわけだが、この章では、『四卷楞伽』に於ける「妄想」の記述と、初期の禪録や禪論書に於ける「妄想」の記述との関係について調べてみたい。そうする事により、中国禪における「妄想」を、インド仏教から中国仏教への思想の流れの中で、より明確に把握できると思うからである。

そこでまず、中国禪思想における「妄想」の基本的理解を示す例を幾つか挙げると、『菩提達磨四行論』では、『齊

知之所解者、是妄想分別。⁽³⁹⁾「但有心分別計校自心現量者、皆悉是夢。覺時無夢夢時無覺、此心識妄想。」⁽⁴⁰⁾「若作
如レ此解者、是妄想心顛倒。不了自心現境界、名為波浪心。」と説かれ、『絶観論』には、「何名妄想。答曰。想
念心是。」⁽⁴¹⁾・「只為於無心中而立心故。乃生妄想。」と、『伝心法要』には、「一念離真、皆為妄想。」と、
『宏智広録』には、「只爾思惟分別底、是妄想。見聞覚知底、是妄想。」と記されて、「妄想」が、思惟分別し見聞覚
知する心作用であり、想念心であり、ひとし並みの知で解された内容であり、無心に對し、真を離れた念である事が
示されるが、これらの表現を可能にする要素を『四卷楞伽』に探ると、『四卷楞伽』では、五法の内の「妄想」が
「真如」に對置され、(一)の(C)では「妄想説所想。」という表現が用いられている。又、右に引用した『菩提
達磨四行論』の文中に記される「自心現量」・「自心現境界」は『四卷楞伽』特有の用語であり、この内 svacittadīśya-
nātra の訳である「自心現量」は、(一)の(J)などに示される様に、妄想を生じなくする為に覚知さるべき内容
であるが、ここではその、分別された自心現量なるものが、夢であり心識妄想であるとされる。これは、(一)の
(f)の「觀察世妄想。如幻夢芭蕉。」という記述に類似している。他方「自心現境界」は svacittadīśyaviśaya, sva-
cittadīśyagocora の訳で、自心所現の對境を意味するが、ここでは、それを了しない事が、「妄想心顛倒」と共に、
誤った見解を為す者の在り方として記されている。

次に「妄想」の除去について記した例を挙げると、『菩提達磨四行論』には、「為除妄想、修六度、而無所
行、是為称法行。」と、『伝心法要』には、「如今但学無心、頓息諸緣、莫生妄想分別。」・「息却思惟、妄想塵
勞、自然不生。」と、『江西馬祖道一禪師語録』には、「了心及境界、妄想即不生。妄想既不生、即是無生法忍。」
と、『達磨大師悟性論』には、「不生妄想、名涅槃。」と、『頓悟大乘正理決』には「若安心不起、離一切妄想者、
真性本有、及一切種智、自然顯現。」などと述べられている。この内、『伝心法要』の、無心を学んで妄想分別を生ず
る事がないとする教理は、自心現量即ち唯自心所現を覚知する事によって妄想が生じなくなるとする『四卷楞伽』の

教理と一見異なる様だが、『四卷楞伽』では、*niscit(t)yaṃ citamātram hi citamātram vadami aham* が「無心之心量、我説為三心量。」と訳され、無心なる心量 (*citamātra* 唯心) を心量と説くとされるし、上田義文氏も述べる様に「無心と唯識とは結局同じものを指している」のだから、両教理は決して無関係ではない。又『馬祖語録』の「了心及境界一、妄想即不生。」という記述は、(一)の(一)に示した『四卷楞伽』の「不識心及縁。則起三妄想。了心及境界。妄想則不生。」という表現に従っていると思われるが、『四卷楞伽』のこの部分は、『歴代法宝記』にも、無住和尚の引用語として記されている。又、『悟性論』の「不生妄想、名涅槃」という記述は、(一)(n)の「妄想滅。名為涅槃」という教理に対応している。

その他、引用文として、『伝法宝記』には、「菩薩摩訶薩、独一静処自覚觀察、不_レ由_レ於他、離_レ見妄想、上上昇進、入_ニ如来地、是名_ニ自覚聖地。」・「宗通者、謂縁_ニ自得勝進相、遠_ニ離言説文字妄想……」という、「妄想」の語を含む『四卷楞伽』の経文が引かれ、『歴代法宝記』にも、『四卷楞伽』の「経経説_ニ妄想。終不_レ出_ニ於名。若離_ニ於言説。亦無_レ有_ニ所説。」という「妄想」の語を含む経文が、無住による引用として記され、『楞伽師資記』の浄覚の自序には、『四卷楞伽』に記される「妄想」など五法が提示される。

この様に、禅の語録や論書の内に、『四卷楞伽』の「妄想」の記述の影響を受けた箇所は幾つか存在するが、(一)の引用文から判る様に、『四卷楞伽』には「妄想」について多くの事が論述されているし、『四卷楞伽』は、初期の禅宗において重要な經典とされたわけだから、右記の禅録や禅論書の表現については言うまでもなく、雪峰義存(八二二—九〇八)が、「自己事若未明、何処消_ニ得許多妄想。」と述べたり、(一)に示した様に、無業や雲門が「莫妄想」と述べるなど、「妄想」という語が禅で用いられる背景に『四卷楞伽』の存在した事は、看過できない事だと思う。

さて以上記した中国仏教に於ける「妄想」は、仏教の伝来と共に、日本の仏教に於いても用いられ、禅宗でも、棄去すべき心象として数々用いられた。そこで臨濟禅の一例を挙げると、江戸時代の禅僧・白隠慧鶴(一六八五—一七

六八)は、「十二時辰、三四威儀たけく精彩をつけ、間もなく励み進み侍らば、いつしか妄想思量の境を打ち越え、…」・「自己脚跟下の大事を了簡分別して以て足れりとせば、一生妄想の魔網を破ること能はじ。」などと、「妄想」の境を打ち越ゆべき方法や「妄想」の魔網を破れない場合などについて述べている。

「妄想」の適用は仏教内に限らない。「妄想」は、民衆の間に広まって、猥雑なニュアンスを帯び、「淫らな思い」とか「うわごと」という意味でも用いられた。やがてこの「妄想」は、心理学用語に借用され、「被害妄想」「誇大妄想」などと表現される様になるが、今日様々な場合に用いられる「妄想」が、仏教の長い歴史の中で形成されてきた言葉である事は、再認識する必要があると思う。

〈略号表〉

Der. Derge edition
 Lan̄k. Lan̄kāvatāra-sūtra Bibliotheca Otaniensis vol. 1
 ed. B. Nanjo, Otani University Press, Kyoto
 1923
 Pek. Peking edition
 P. T. S. Pali Text Society

大正 大正大藏經
 『四卷楞伽』 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』大正一六
 pp. 480—514

- 註——
- (1) 『広辞苑』岩波書店 p. 2183
 - (2) 『精神医学事典』弘文堂 昭和五十年 p. 633 『世界大百科事典』平凡社 vol. 21 p. 736 参照
 - (3) 宮本忠雄『妄想研究とその週辺』弘文堂、昭和五十七年 p. 390
 - (4) 『論語引得』『莊子引得』『漢書索引』『文選索引』など、仏教以外の中国の古典の諸索引に「妄想」の語を探

したが、見い出せない。「妄想」が仏教特有の用語である事については、中国文学者、入矢義高先生の助言を受けた。

- (5) 上田義文、「妄念論」(『印度哲学と仏教の諸問題』岩波書店 昭和二十六年所収) p.101
- (6) 『望月仏教大辞典』には妄想について、「虚妄の想の意。又妄想分別とも名づく。即ち虚妄顛倒の心を以て諸法の相を分別するを云う。」と説明され、織田得能著『仏教大辞典』には、「妄に分別して種々の相を取るを妄想と云う。」と説明され、中村元著『仏教語大辞典』には、「真理に背いた虚妄不実の想念」など「妄想」の幾つかの意味が挙げられる。
- (7) 「初達磨禪師、以『四卷楞伽』授」可曰。我觀漢地。惟有「此經。仁者依行自得」度世。」(『統高僧伝』卷第十六、慧可伝) 大正五〇 p.552 b 柳田聖山氏は、『楞伽經』とダルマ・恵可の結びつきは、法沖の時代に至ってはつきりした伝統となつたらしい、と述べている。(柳田聖山『初期の禪史』) 禅の語録 2 筑摩書房 昭和四十六年 p.10)
- (8) 「凡学者致問、師多答之云、莫妄妄想。」(『景德伝燈録』卷第八 新文豊出版公司印刊 p.122)
- (9) 「時印宗問衆人、汝総見風吹幡干、上頭幡動否。衆言、見動。或言、見風動。或言、見幡動。不是幡動、是見動。如是問難不定。恵能於座下一立、答法師、自是衆人妄想心動身不動、非是幡動。法本無有動不動。」『歴代法宝記』(柳田聖山『初期の禪史』) 禅の語録 3 所収) p.123
- (10) 「諸和尚子、莫妄想。天是天、地是地、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗。」『雲門広録』(柳田聖山主編『四家語録・五家語録』禅学叢書之三 中文出版社 所収) p.168 長沙景岑もこの語を用いている。「長沙和尚因竺尚書問蚯蚓斬為兩段。兩頭俱動。未審仏性在阿那頭。曰、莫妄想。」『大慧正法眼蔵』卷六 巳統蔵経 一一八冊 p.143
- (11) 「言無心者即無妄想心也。」(衆生迷妄。於無心中而妄生心。」「我雖無心。能見能聞能覺能知。」『無心論』(『鈴木大拙全集』第二卷 所収) pp.216-219 参照。
- (12) 原田覚氏も、この述語(妄想)が古くから禅宗にとり入れられていた事を認めている。原田覚『頓悟大乘正理決』の妄想説について、『印度学仏教学研究』第二十五卷 第二号 p.760
- (13) 例えば、nirvikalpa bhavet kena (Lank. p.25) が『四卷楞伽』で「離妄想者誰」と訳されるのに対し、『楞伽經』では「云何無分別」と、『大乘入楞伽經』では「云何離分別」と訳される。(大正一六 p.480 c, p.519 c, p.591 a)
- (14) 『四卷楞伽』 大正一六 p.511 a
- (15) 同右 p.511 b

- (16) 同右 p. 497 a
- (17) 同右 p. 491 c
- (18) 同右 p. 508 a
- (19) 同右 p. 499 c
- (20) 同右 p. 510 a
- (21) 同右 p. 485 a
- (22) Yogācārabhūmi (tibet.) Pek. vol. 111 p. 61—2—3
- (23) yena tannāma samudrayati nimittabhiyañjakaṃ samadharmeṭi vā sa mahāmate cittacaittasamśabdīto vikalpaḥ / Lanṅk. p. 228
- (24) 以下の和訳には、安井広済訳『梵文和訳・楞伽經』（昭和五十一年 法蔵館）と、高崎直道『楞伽經』（仏典講座一七 昭和五十五年 大蔵出版）を参照。
- (25) Lanṅk. p. 226, p. 228
- (26) 大正四四 p. 523 a
- (27) Lanṅk. p. 132
- (28) tasmāt tarhi mahāmate utpādasthiṅbhaṅgaikatvānyatvobhayañubhayanastyastayāpratyātmaavastvadhigamavikalparāhiṇa bhavitavyam // Lanṅk. p. 95
- (29) Lanṅk. p. 49
- (30) Lanṅk. p. 149
- (31) sarvaṃ hi mahāmate tribhavam abhūtavikalpaprabhavam... Lanṅk. p. 218
- (32) 『四卷楞伽』 p. 500 a
- (33) Lanṅk. p. 152 ① チベット訳は yan dag pa ma yin pa'i don sna tshogs la mñon par chags pa 'byun ste / (Pek. vol. 29, p. 53—2—8) となっており、三漢訳はそれぞれ「種種不実義」「種種諸義」「種種自心所現諸境界」であるから、abhūtārthavaicitryābhinniveśāt「種々の虚妄な対象を愛着する事から」、が正しいと思われる。Lanṅk. p. 152 の脚註には tryābhi, Chin. Tib. と記されている。
- (34) 『四卷楞伽』 p. 503 c
- (35) Lanṅk. p. 177
- (36) 『四卷楞伽』 p. 510 c—p. 511 a
- (37) Lanṅk. p. 225
- (38) 『四卷楞伽』 p. 504 a
- (39) 同右 p. 504 b
- (40) 同右 p. 507 b
- (41) 同右 p. 505 b
- (42) Lanṅk. p. 186
- (43) 『四卷楞伽』 p. 503 c
- (44) 同右 p. 496 a
- (45) 同右 p. 492 b
- (46) 同右 p. 512 a
- (47) Lanṅk. p. 176
- (48) Lanṅk. p. 126

- ⑤ Lank. p. 99
 ⑥ Lank. p. 233
 ⑦ 『因縁論』 p. 495 a
 ⑧ 同右 p. 487 c
 ⑨ 同右 p. 496 b 原文は以下の通りである。
 tatra mahāmate katamat parikalpiyasvabhāvaprabhe-
 danayalakṣaṇaṃ yadutābhilāpavikalpo 'bhīheyavi-
 kalpo lakṣaṇavikalpo 'rthavikalpāḥ svabhāvavikalpo
 hevivikalpo dṛṣṭavikalpo yuktivikalpo utpādvavikalpo
 'nutpādvavikalpo saṃbandhavikalpo bandhābandhavi-
 kalpāḥ / Lank. p. 128
 ⑩ 『因縁論』 p. 487 c
 ⑪ 同右 p. 511 b
 ⑫ Lank. p. 67
 ⑬ 内藤氏は『大方便仏報恩経』を、五世紀に中国で改修構
 成が行われた翻訳經典だと考えている。内藤龍雄「大方
 便仏報恩経について」『印度学仏教学研究』第三卷第
 二号 p. 697
 ⑭ 大正五五 p. 21 c
 ⑮ 大正四九 p. 53 a
 ⑯ 大正三 p. 140 a
 ⑰ Peka. vol. 40 p. 308—2
 ⑱ ibid. ① Der. aḥ, 127—b—1
 ⑲ 大正四九 p. 54 c
 ⑳ 大正二四 p. 1026 c
 ㉑ 大正五五 p. 24 b
 ㉒ 『公不妄笑』安世高訳『仏説自誓三昧経』大正一五
 p. 345 a
 ㉓ P. M. Harrison "The Tibetan Text of the Pratyut-
 panna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhisūtra"
 Reiyukai Library 1978 p. 78
 <フレンダ> 上記のモヤード訳の終り英語のところが、
 He obtains this Samādhi, who knows that [things
 are] unconstructed (akalpa), uncreated (akṛta),
 and undestroyed (avināśita?). Knowing that all
 forms are unconstructed (akalpa), Wherever he
 looks his vision is unattached (asaṅga).
 The Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samād-
 hi-Sūtra, An Annotated English Translation of the
 Tibetan version with Several Appendices, A Thesis
 submitted for the Degree of Doctor of Philosophy
 in the Australian National University, August 1979
 大正一三 p. 909 a
 ㉔ 大正一六 p. 816 a
 ㉕ tatrāvidyā katamā? yā eṣeva śāddhātusū ekasaṃjñā
 piṅḍasaṃjñā nityasaṃjñā dhruvasaṃjñā śāśvata-
 ssaṃjñā sukhasaṃjñā sattvajīvañāntuṣāpuruṣāpudga-
 lamānujāmānavasaṃjñā ahaṃkāramamakārasaṃjñā,

- evamādi vividhamajñānam, iyanucyate avidyeti / Paris 1973 p.59
- ① [Ms. vividhavijñānam (Stc)] (V. V. Gokhale: Madhyamaka-Śālistambasūtram, Buddhist Sanskrit Texts No.17 p.111) Cf. Pek. vol.34, p.305-1-1 大正一六 pp.817-824 參照
- ② 大正八 p.496 c
- ③ “Aṣṭaśaṣṭika-prajñāpāramitā” Buddhist Sanskrit Text No.4 p.176
- ④ 大正一四 p.523 a
- ⑤ 大正一四 p.541 b
- ⑥ Pek. vol.34 p.80-3-5
- ⑦ 大正一四 p.525 c
- ⑧ 大正一四 p.544 c
- ⑨ Pek. vol.34 p.84-4-1
- ⑩ 大正一四 p.526 a
- ⑪ 大正一四 p.544 c
- ⑫ Pek. vol.34 p.84-5-6
- ⑬ Pek. vol.34 p.85-2-8
- ⑭ 大正一四 p.526 b
- ⑮ Dīgha-Nikāya P. T. S. vol. I p.4
- ⑯ 大正一 p.264 b
- ⑰ 常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』昭和十三年 p.669 參照。
- ⑱ P. Pythou, “Vinaya-Vinīścaya-Uṇṇā-Pariṭicchā”
- ⑲ 相續部論のキヤナル能ハ公能ヤ次ニ記テ。
'di na de la 'ah byed po 'ga' med de // de dag
rog pa'i dhan' gis bzag pa yin // (p.59) Pour ces
choses non plus il n'existe aucun créateur, Le
pouvoir de l'imagination les a échafaudées. (p.129)
- ⑳ 大正一一 p.42 a
- ㉑ 大正九 p.72 c, p.75 c Cf. “Saddharmapuṅḍarīka-sūtra” Buddhist Sanskrit Text No.6 pp.41-54, Pek. vol.30 pp.13-16 ㉒ ㉓ p.72 c ㉔ 『毘婆沙論』
の「善相」大正九 p.10 a) ㉕ 校訂本に於てハ此ノ
ベシナク。
- ㉖ 大正一一 p.139 b
- ㉗ Pek. vol.24 p.130-1-2
- ㉘ 大正一四 p.34 b
- ㉙ Pek. vol.27 p.35-4
- ㉚ 大正一七 p.757 b
- ㉛ Pek. vol.35 p.127-2-5, Der. dza, 192-a-4
- ㉜ Pek. vol.27 p.23-2-3
- ㉝ 大正一四 p.20 c
- ㉞ Pek. vol.27 p.24-4-1
- ㉟ 大正一四 p.21 c
- ㊱ 大正一〇 p.618 bc, 619 b, etc.

- (80) 生存年代は、岡部和雄「空法護伝再構成の試み」『仏教史学』第十二巻第二号 p. 9 に従う。
- (81) 段玉裁『説文解字注』蘭台書局印行 p. 629
- (82) 『礼記注疏』卷三十三経注疏の 蔡文田書 p. 64
- (83) 大正四四 p. 523 b
- (84) 大正四四 p. 528 a
- (85) Pek. vol. 25 p. 88—3—3
- (86) 大正九 p. 425a
- (87) 大正一四 p. 638 b
- (88) Pek. vol. 34 p. 31—1—5
- (89) 大正一一 p. 66 b
- (90) 『菩提達摩四行論』(柳田聖山主編 禅学叢書二 所収) p. 14
- (91) Dhammapada P. T. S. p. 42
- (92) Majjhima-Nikāya P. T. S. vol. III p. 72, p. 251, etc.
- (93) Samyutta-Nikāya P. T. S. vol. II p. 143
- (94) Samyutta-Nikāya P. T. S. vol. I p. 22 1) 句は『俱舍論』に引用され、saṅkalpa-parāgaḥ puruṣasya kāmāḥ / 心記心だ (“Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu” ed. P. Pradhan Patna 1967 p. 386) 妄想といふ「真欲謂人分別貪。」と訳されてゐる。(大正二九 p. 41 c) kun rtoḡ 'dod chags (Pek. vol. 115 p. 167—1)
- (95) saṅkalpaviśādigdhā hi pañcendriyamayāḥ śarāḥ / cintāpūṅkhā ratiphalaḥ viśayākāśagocarāḥ // (“The Saundarananda of Aśvaghoṣa” ed. E. H. Johnston, Oxford University Press 1928 p. 93)
- (96) “Madhyamakāśāstra of Nāgārjuna” with the comment tary: Prasannapadā by candrakīrti, Buddhist Sanskrit Texts. No. 10 p. 197
- (97) 大正三〇 p. 31 a
- (98) 大正一四 p. 470 c
- (99) “Madhyamakāśāstra of Nāgārjuna” 上巻 p. 153
- (100) Dhammapada P. T. S. p. 69
- (101) trivīdhāḥ kīlā vikalpāḥ / svabhāvābhiniropānūs-marāṇavikalpāḥ / / tarta svabhāvavikalpo vīārkaḥ / ... itarau punaḥ kirpīsvabhāvau / yathākramanḥ, tau prajāṇmānāsi vyagrā smṛtiḥ sarvaiva mānāsi // (Abhidharmakośabhāṣya 上巻 p. 22)
- (102) tasmad duṣyati nāhāro vikalpo 'tra tu vāryate / (“The Saundarananda of Aśvaghoṣa” 上巻 p. 97)
- (103) 中世論叢『梵漢校照・梵文 | 果實注論研究』昭和三十六年 p. 21
- (104) “Madhyamakāśāstra of Nāgārjuna” 前掲書 p. 149
- (105) Pek. vol. 95 p. 224—3—5
- (106) yadā tu tatpratipakṣalokottaranirvikalpa-jānālabhāt prabuddho bhavati tadā tatprīśalabdhasūddhalaūkika-jānāsanmukhibhāvād... (Sylvain Lévi, Vijnāpti-

mātrātāsiddhi. Deux traités de Vasubandhu : Vimśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une explication en prose, et Trīṃśikā (la Trentaine) avec le commentaire de Shīramatī, Paris 1925 p. 9)

(70) 長尾雅人『撰大乘論・和訳と注解』インパクト古典叢書 講談社 昭和五十七年「チノム」訳(同書 p. 75)を次に記す。

kun tu rtog pas ji ltar kun tu rtog / dmigs pa gañ
 dañ / mtshan mar 'dsin pa gañ dañ / mñon par 'žen
 pa gañ dañ / riag kun nas sloñ ba gañ dañ / tha sñad
 gañ dañ / sgro 'dags pa gañ gis kun tu rtog ce na
 / min gis dmigs pa dañ / g'zan gyi dhañ gi ño bo
 ñid la der mtshan mar 'dsin pa dañ / lha bas de la
 mñon par 'žen pa dañ / rnam par rtog pa rnam k'yi
 riag kun nas sloñ ba dañ / mthoñ ba la sogs pa tha
 sñad b'zi po dag gis tha sñad 'dags pa dañ / med
 pa'i don la yod do 'zes sgro 'dags pas kun tu rtog
 go /

- (71) Pek. vol. 34 p. 81—4—8
 (72) "The Saundarananda of Asvaghosa" 前掲書 p. 94
 (73) Pek. vol. 109 p. 310—1—7
 (74) 大正三〇 p. 366 c
 (75) Pek. vol. 25 p. 88—1—6
 (76) 大正九 p. 424 c
 (77) 『菩提達磨四行論』 前掲書 p. 22

(78) 同右 p. 16

(79) 同右 p. 25

(80) 『絶観論』(『鈴木大拙全集』第二卷 所収) p. 199

(81) 同右 p. 188

(82) 入矢義高『伝心法要・宛陵録』 禅の語録 8 昭和四十

(83) 四年 p. 30

(84) 大正四八 p. 67 b

(85) Lanik. p. 62, p. 127

(86) 『菩提達磨四行論』前掲書 p. 14

(87) 『伝心法要』前掲書 p. 134

(88) 同右 p. 135

(89) 『江西馬祖道一禪師語録』(柳田聖山主編『四家語録・

五家語録』禅学叢書之三 所収) p. 5 引用した部分を

前後の文と共に記す。「一悟永悟、不復更迷。如日出

時不_レ合_ニ於_レ暗、智慧日出不_レ与_ニ煩惱暗_レ俱。了_ニ心及境界_レ、

妄想即不生。妄想既不_レ生、即是無生法忍。本有今有、

不_レ復_ニ修道坐禅_レ、不_レ修不_レ坐、即是如来清淨禅。」

(90) 『達磨大師悟性論』『正統藏經』第一一〇冊 p. 816

(91) 『頓悟大乘正理決』(長谷部好一「吐蕃仏教と禅」愛

知学院大学文学部紀要 第一号所収) p. 81 『正理決』

には幾つか『大乘入楞伽經』(七卷楞伽)からの引用が

ある。

(92) Lanik. p. 153 (1) *sems med pa yi sems tsam ste*

(Pek. vol. 29 p. 53—3—5) 「決定唯是心」(『大乘入楞

- 伽經』大正一六 p. 609 c
- 053 『四卷楞伽』 p. 500 b 『唯識三十論』では、唯現象識性 (vijñaptimātrātā) に定めた心が、無心であり、無取得であり、出世間智であると述べられる。 yadaivaṃ vijñapimātrātāyām citam avasthān bhavati / tadā katham vyapadīśyata ity āha / acito 'nupalambho 'sau jñānaṃ lokotarāṃ ca tat / ("Vijñapimātrātā-siddhi" Triṣṭika avec le commentaire de Sthiramati 前掲書 p. 43)
- 054 上田義文「無心について」(『福井博士頌寿記念・東洋思想論集』昭和三十五年) p. 808 上田氏は、「唯識説と禅」(『仏教学研究』No. 16, 17 昭和三十四年 pp. 19—25)でも、唯識と無心の関係を論じている。
- 055 「即引楞伽經云、愚夫樂妄説、不聞真實惠。……於妄想心境、愚生二種見。不識心及縁、即起二妄想。了心及境界、妄想即不生。」『歷代法宝記』前掲書 p. 226
- 056 『伝法宝記』(柳田聖山『初期の禅史1』禅の語録2) p. 331 『四卷楞伽』の引用箇所、大正一六 p. 497 b
- 057 同右 p. 337 大正一六 p. 499 c
- 058 『歷代法宝記』前掲書 p. 233 『四卷楞伽』大正一六 p. 505 b
- 059 『楞伽師資記』(柳田聖山『初期の禅史1』禅の語録2所収) p. 63
- 060 『雪峰語録』(『四家語録・五家語録』前掲書の附録)
- p. 249
- 061 『數柑子』(『白隠和尚全集』第五卷 龍吟社 昭和九年) p. 321
- 062 『遠羅天笠』(『白隠和尚全集』第五卷) p. 143
- 063 夢窓疎石(一二七五—一三五一)の『夢中間答』には、妄想について、「いまだ本分には到らざる人の識情を以て、其の言句に随って義理を領解するは、悉く是れ妄想なり。」と説かれる。(佐藤泰舜校訂『夢中間答』岩波文庫、昭和九年、p. 84)
- 064 『日本国語大辞典』(19) 小学館 昭和五十一年 p. 235 参照